

猪垣（ししがき）の分布について

矢ヶ崎 孝 雄

A Study of the Distribution of "Shishigaki"

Takao Yagasaki

はしがき

これまで農山村を調査して、^{ししがき}猪垣のことを知り、常に関心と興味を注いできた。イノシシの害を防除し、作物を守るために長大な防壁を設けることは、中国の万里の長城や、海外からの襲撃に備えた北九州の水城や石塁にも比せられ、これらを実現した折にも、常に猪垣のことが頭に浮かんだ。また、広大なアメリカ大陸の放牧場が鉄線で囲まれているのをみても、逆の目的ながら、その労力の大きさを想像した。各地の研究文献等を見ている、猪垣に関する文献が目にとまり、かような事例が広く全国に及んでいることを知り、いっそうその興味を増した。そこで、今回この猪垣の全国的な分布調査を試みることにした。この報告はその第一歩で、本稿はその一覚書であり、また具体的には岐阜県について考察を試みた。大方の叱正と教示と仰ぐ次第である。

猪垣の意義

農耕民にとって、田畑の耕作物の豊かな稔を祈念することは、最大の関心事であったといえよう。豊作祈願の信仰がいまに継承され

てきているのもこの反映とみられる。この豊かな稔を害するものには、天災と称される各種の自然現象があり、これと関連する面もあるものの、病虫害や鳥獣害など多くの災害が存在する。虫送りや鳥追いなどの伝承の行事が現在も各地で見られるのは、それらの害の著しいことにも関連しているように思われる。このうち野獣の害にも著しいものがあり、地域によってはその駆除に多大の関心を示してきているのである。野獣のうちでも、イノシシの害には特に悩まされた地域が広くあり、かつ現在でもその駆除に腐心している事例のみられる地域もある。

イノシシと農耕の係りから、本論稿が成立するのであるが、人類にとってイノシシは縄文時代に狩猟面で、重要な対象物であった。その肉・皮・骨などそれぞれに利用されてきたのであるが⁽¹⁾、豚として家畜化されたのも比較的早く⁽²⁾、現在に至るまで、人類の生活を支えてきているのである。

イノシシの肉はボタン肉・山鯨と称され、美味で現在でも珍重され、岐阜県郡上郡^{ぐじょう}八幡町には専門の店がある⁽³⁾。この動物は種々の特色をもっている点で注目されている。その諸点を要約してみると、雑食性で、竹の

子、木の実、イモ類、穀類などの作物のほか、サワガニ・ミミズ・カエル・ヘビなどの動物も捕食する。イノシシの雄はキバが大きく、これで土を掘り起こし、地中の植物や動物を採食するのも著しい。昼間は草林のなかで寝て、夜に活動する夜行性の動物である。沼地や水田でのた打ち廻るが、これは寄生虫をとるためとされ、周囲の樹幹に体をこすり、樹皮がはがされるようになるといわれる⁽⁴⁾⁽⁵⁾。水中を泳ぐことも上手で、体毛を口にくわえて水中に入ると、寄生虫がくわえた体毛に集まってくるので、時を見計らって体毛を放すと、寄生虫もともに流されるという。これはまことに巧妙な手法と思われる。走るのにもスピードがあり、100kmも移動し、その行動範囲も著しく大きい⁽⁶⁾点も特色である。

しかも、多産であり、時に十数頭の仔を生むともいわれる。仔は縞のある体毛が特色で、瓜に似ていることからウリンボー（瓜坊）と称されている。春先に仔を産み、群をなして移動する。ただ、積雪時には脚が短いためか、困却する。深雪地域では生息が困難となり、雪のない地域へ移動する⁽⁷⁾が、急激な降雪があり、かつ大雪の場合は脱出できず、大量のイノシシが斃死することもあった。丁度この気候界にあたる飛騨や郡上郡では、多数のイノシシが雪に閉じ込められ死んだ⁽⁸⁾⁽⁹⁾が、その死体を葬って鹿供養塚⁽¹⁰⁾を建立してやったことなど、その獣害に悩まされるものの、心温まるものを感じる。しかし、この雪の季節は槍でイノシシを捕らえるのにも適し、『斐太後風土記』のさし絵がよく知られるものである。

農作物をイノシシの害から護るためには、農民は苦勞し、古くから各種の手段がとられてきた。それは大きく分けて2つあり、1つはイノシシを捕獲すること、1つは耕地に防壁を設けてその侵入を防止することである。なお、後者の施設に前者を加味したものもある。縄文時代からの狩猟の伝統のなかで、防

壁を設けてその害を防除する手段は、とくに注目をするもので、これには仏教の思想も関係しているのかも知れない。焼畑農民のイノシシ対策として、野本寛一は防除と狩猟捕獲の2方法に大別し、その諸手法を体系的にかつ詳細に分類し、具体例をもって説明されている点⁽¹¹⁾は大へん有難い。この方法は焼畑だけでなく、イノシシの居住域と接する田畑の地域にも適用されるものである。

いま、ここに採り上げる研究テーマは、もちろん捕獲・防除の両者に係るものではあるが、その主軸はイノシシの田畑への侵入防止、すなわち防除の問題である。この防壁を一般に猪垣^(ししがき)（ししかべ・いがきその他の呼び名もある。）と称するほか、猪土手、猪鹿除^(ししよけ)、その他多様の呼称がある。簡単なものは田畑の周囲にさげる白紙・布片、縄・ビニールであり、さらに木柵・石垣・土塀など土木工事を施し、田畑や集落などに対して野獣が近づけぬようにする施設をいうのである⁽¹²⁾。その防除法としては大別して臭気・音・垣・堀の4種が挙げられる⁽¹¹⁾。イノシシは臭いに対しては敏感な動物で、猪肉・魚の臭や、猪毛、人の頭髮や布・タイヤの燻臭などを嫌うので、これらを設置することで効果を生ずるとされる。音では鳴子や水力利用のバッテリーなども効果的である。これらに対して、木柵・土手・堀・石垣などは工事も大きく、恒久性も増して来、とくに石垣は長く残り、土手・堀も形態を残すものがみられる。しかも、これらが三河宮崎のように2～3km⁽¹³⁾のものから、香川県小豆島、池田町の120km⁽¹⁴⁾、長崎県西彼杵半島では70km⁽¹⁵⁾に及ぶものがある。かような長大な猪垣の建設には、伊那谷にみられるように多大の資金と労力を要し、さらにその管理・維持にも相当の経費と労力が払われた⁽¹⁶⁾。それほどまでにして防除に努めたことは、イノシシの被害が極めて著しく、農耕上緊要な問題であったとみられるのである。

猪垣について筆者が始めて知ったのは、30余年前、飛騨における商品流通の研究を進めていた時である。以後これについては常に関心はあったものの、研究テーマとしては採り挙げなかった。そのあと対馬へ旅行する機会があり、ここで「豊玉の猪垣」が山頂にまで220m続くのを実見し、その万里の長城的な形態に関心をさらに深めた。この石垣には諸説があるようであるが⁽¹⁷⁾、かつて島で8年もかけイノシシを追い詰め、全滅に導き⁽¹⁸⁾、その結果農業の生産量を増し、人口も増大したということを知って、その被害の著しさと島民の対応の厳しさに感嘆させられた。かような防壁が各地に存在することを知り、猪垣は人間の居住界と野獣界とを画するものであり、それがイノシシを捕獲することを主目的とせず、共棲ともいえる形をとっていることに、いっそうの興味をひかれたのである。そこで、ここに猪垣の研究を始めたわけである。とくに地理学の研究としては、猪垣の全国的な分布を明らかにして、その特色を把握し、その構造・機能と管理等について考察し、さらにイノシシの害が現在も著しい地域が生じていることから、その現代的意義も究めることを考えたのである。幸い、昭和63年度には文部省の科学研究費補助金の交付を得たので、まず全国的にこの資料を蒐集することから研究を開始した。本報告書はその1部をなすものである。

とくに猪垣の系統的な研究が稀である⁽¹⁹⁾とされていることから、本研究がこの面の研究に若干でも貢献できることを祈念しているものである。

猪とその防除

猪垣の分布を明らかにするうえで、イノシシの生息地域を知ることは重要である。民俗学者の早川孝太郎は戦前よりイノシシの研究を進め、『猪・鹿・狸』の名著を表したが、東北地方を調査して、イノシシの出ないこと

を初めて知り、特筆すべき問題としている⁽²⁰⁾。戦後、これらの研究は千葉徳爾により意欲的に進められ、その分布も明瞭になってきた⁽²¹⁾。大局的には西南日本の太平洋岸山地に多く、中国山地から東海山地にも分布する。かつての居住地域はひろく、中央高地・関東から東北地方に及んでいる⁽²²⁾。なお環境庁の調査では全般にさらに拡大しており、上信越国境、阿武隈山地にも広く分布をみる⁽²³⁾。

動物学的に日本におけるその可能な分布を明確にしたものをまだ見ていないが、人間との係りにおいて、相当の変化の生じていることは明らかである。縄文時代におけるイノシシの生息範囲は広がったようである⁽¹⁾。それから有史時代を経て、狩猟により、その頭数や分布範囲は縮小されてきているようである。江戸時代における対馬の撲滅作戦はその極端な例といえよう。しかし、その後も若干は対馬に残ったようであり、また5対を朝鮮の絶影島へ移したともいい、動物の根絶をさけた配慮ともみられている⁽¹⁸⁾。

日本におけるイノシシの生息の一端は、各都道府県単位で編纂発行されている大百科事典類を見るところがわかる。イノシシの項目を欠いているのは、東北・北陸地方の諸県のものに多い。猪垣の項やこれに関する記事もまたイノシシの項と関連し、沖縄から九州・四国・中国・関西にわたり、中央高地・東海・関東の事典にみられるのも興味深い。しかし、青森県においては江戸時代中期(1749—1951)の凶作時、イノシシが異常繁殖し、その食害も甚だしく、猪飢饉と称した⁽²⁴⁾。当時、この地方にまでイノシシの生息がみられたことが知られる。ところで、全国的にイノシシの生息頭数や範囲は近年増大しているようである。とくに移動範囲が広く、多産のこの動物は条件がよければ、即座に生息地域を拡げるように思われる。関東地方から北の福島県へも拡がり⁽²⁵⁾、さらに北の宮

城県南部が北限となっている⁽²⁶⁾。また積雪地にはいないとされるが、能登半島にも生息したし、猪垣が志賀町^{しかまち}においても存在したことを聞いている⁽²⁷⁾。時代に応じてイノシシの生息範囲は変動もしているわけであり、その分布を知るにはかなり入念に調査を進めることが肝要と感じているものである。

つぎに防除策をみると、前述のように臭・音・垣・堀などの伝統的な手法と、電気・トタンなどをを用いた柵などの近代的なものがある。臭や音の発生手段は恒久性に乏しいものが多いので、その実態は聞き取り調査を行い、その伝承を調べることが必要に思われる。他方、土木工事を伴う垣や堀などの猪垣は現在まで残存している。とくに石垣を築いたものはよく残され、市町村さらに県の文化財に指定されているもの⁽²⁸⁾もみられる。土手や堀は崩れたり、埋没したものが多いが、なお、その原型を辿るよすがはある。木柵は朽ちるので残りえない。しかし、これらも伝承があり、また文書などの記録の残されている場合もあるので、復元はなし得られよう。なお、これらは崩壊したものもあるほか、近年の道路建設や都市化に伴う諸工事などで破壊された事例もあり、その原型を復元することには多大の困難が伴うものと思われる。

ところで、これらの猪垣の建設や維持管理は、小規模のものは耕作者が個人的に行うものである。しかし、規模が大きくなると共同で行うか、江戸時代の各村・集落単位で構築し管理するものもあり、その経費も各村でもったりで⁽¹⁶⁾相当の負担になった。また藩が補助したり、築造⁽²⁹⁾のものもあった。

現在においても、神奈川県⁽³⁰⁾下や兵庫県⁽³¹⁾下ではイノシシの害が著しく、県が電気柵やトタン柵を補助して造らせ、防除につとめている。宮崎県下でも同様⁽³²⁾であり、沖縄県においても、有害鳥獣・補助金制度を設けて猪害防除に努めており、江戸時代からの猪垣^{いがき}とあわせて防除対策を進めている⁽³³⁾。

かような猪垣は、イノシシの居住する林野地域と耕地の間に設けられるのが一般であり、林野は多くの場合に山地に相当する。したがって、山麓地帯がその境域となるのである。しかし、平地林のある場合は平野部においても猪垣は存在する。茨城県出島村^{でじまむら}は霞ヶ浦に突出する地域であるが、ここに立派な猪鹿土手が存在する⁽³⁴⁾ことを知って驚嘆した。かつてはイノシシの居住はかなり広がったことが理解されるわけで、この調査も相当入念に行う必要のあることを悟らされたのである。

現在、諸文献資料その他により、極力その分布を充実して明らかにするように努めている。その過程で注目されたのは三重県下の実態である。ここでは県が農業の諸調査の一環として災害調査を行い、そのなかで猪垣の調査も行ったことである。そして県下一円の猪垣の分布図⁽³⁵⁾を調製してある。三重県下もイノシシの災害の著しい県であるが、かような調査を試みられたことに多大の敬意を感じているものである。ここでは山麓地帯にあるものの、連続した長大なものではなく、各地に、しかも、かなり濃密に点在して設置されているのが特色である。これはイノシシの出易い耕地が各地にあることの反映とみられるが、このためには、植生・地形やイノシシの生態等の詳細な調査が必要と感じられた。

以上、若干の猪垣分布の事例を述べたが、イノシシの捕獲の手段について、以下に若干記述しよう。縄文時代の狩猟では弓矢や石槍と罠・陥穿が用いられたようである⁽³⁶⁾が、イノシシの防除が本格的に展開をみる江戸時代においては、ワナ・おとし穴のほか猪突槍や竹槍などが用いられ、さらに弓矢に替って鉄砲が重視されるようになった。ワナ・おとし穴・オシなどはイノシシの定まった通路、ウジ・タツに設けられたが、猪垣に併せ設置もした。ウジでは樹上から鉄砲で撃つこともされた。捕獲の場合、猪狩の集団行動がみられ、勢子と猟犬も参加して大々的に行われた。

とくに雪が降ってイノシシの行動がにぶくなるのを好期として行われるのも特色である。なお、猪垣の上から鉄砲でイノシシを撃つことも行われた⁽³⁷⁾。

ところで、江戸時代には鉄砲に^{おとし}獵用と威鉄砲との区別のあったことが注目されよう。威鉄砲は玉はなく、音でイノシシを退散させるものである。しかし、現実には威鉄砲でも玉を入れ撃ったような事例もみられる⁽³⁸⁾⁽³⁹⁾。しかし、かような威鉄砲が用いられていたことは、農民の温和な心理を推察されてほほえましく思われる。これら銃の効果は多大であったようであるが、幕府はこれを厳しく取締った。そこで野獣の害の著しいことを述べて、その所持の許可を求めた。その許可に伴い、厳重な管理、捕獲頭数の報告などを義務づけたのである。それらの資料は断片的に現存するが、なお村別にその所持の有無は「村明細帳」などにかなり記載されている点、イノシシの害の有無を知るのに好都合である。市町村史誌にはこれらの資料が克明に収録されている場合も多く、イノシシの害の実態と対策を知るのには好適なものである。

なお、イノシシや猪垣については、文化庁において調査を進めていることも知った。まだ、その調査結果はみていないが、今後利用させていただく所存である。

上記の諸資料を、まとめて能率的に通覧できるのは、各県立図書館と目し、筆者の居住地に近く、かつ比較的猪垣の事例の多い諸県の実情をまず調べてみた。静岡・愛知・岐阜・三重の東海地域を主体に調べ、長野県に抜け、さらに石川・福井両県の深雪地にも及んだ。なお、地元の埼玉県と栃木・茨城県についても資料を集めた。今年度もこれをさらに拡大し、全国を蔽うように調査を進めていく計画である。現在は文献を集める段階であるが、さらに将来はシステムチックに現地調査を進め、その実態を明確にしていくことにしている。

本報告では、とくに岐阜県下の分布状況について述べるが、大方の教示を得たく、不十分な点を顧みずに発表するものである。

岐阜県の場合

ここで岐阜県下の猪垣をとくに採り挙げて考察するのは、この地域が国土のほぼ中央部にあり、かつ太平洋岸地域から日本海岸地域に接する地域で、猪垣分布の乏しい積雪地に接する県域であることで、比較的小地域で分布を合理的に考察することができることにある。なお、岐阜県下では市町村史誌類の刊行が著しく進んでいることをも配慮してのことである。

さらに好都合なのは、岐阜県下の動物については地元研究者による諸研究物が刊行されていることである。すなわち『岐阜県の動物⁽³⁾』では、県下を地域的に区分して動物の生息を明らかにしている。ニホンイノシシについては北アルプス北部周辺では不明とされるが、県下全域に分布をみる。ただし、飛騨山脈北部から吉城郡北部の山地ではニホンイノシシは全くいないとするものの、明治初年ころには多くおり、田畑の被害も大きかったことを同書は記している。また郡上地方では南部にニホンイノシシが多く、猪垣もよくみかけ、美濃市・関市付近にも猪垣は珍しくないとする。さらに『岐阜ふるさとと動物たち⁽⁷⁾』では人間との係りの面も含めて記述されている。近年のイノシシの増加傾向を記し、江戸時代以来のその防除策としての猪垣の県下各地における存在を述べる。さらに注目されるのは、岐阜県下におけるイノシシの分布図のあることである。これによるとイノシシの分布を欠く地域は、長野・富山・福井の隣接県境の東・北部地域と、南部中央の愛知県境の地域である。このうち飛騨の北部地域ではイノシシの分布を欠く地域がとくに広い。なお、県域中央部に若干の不生育地が点在している。同書にはさらに続編⁽⁶⁾があり、

これにはイノシシの生態を記す。降雪時、エサを求めて大移動するイノシシが尾根筋を南下し、獣道のみられることを示していて興味深い。さらにアンケート調査による猪垣分布図のあることは大へん有益に思われた。その分布は飛驒では高山市周辺地域、下呂町・八幡町の一帯、それに中津川市周囲の東濃、そして大垣市の北部と南部との周辺地域である。県下の北部と南部にみられぬ点はイノシシの前記分布とよく一致する。なお猪垣を高さで区分し、約180cmのものが広くみられるのに対し、東濃では約80cmと低いもののみられる点も特徴的である。

かような研究成果をふまえ、さらに猪垣の分布を明らかにするため、岐阜県教育委員会の教示を仰ぐとともに、前述のように県下の市町村史誌類を閲覧するため岐阜県立図書館の郷土資料コーナーを利用した。同館の好意に深甚の謝意を表するものである。これら資料を整理し、なお疑問の残る市町村に対しては各個に照会して教示をいただいた。以下にこれらの結果を整理して、表1と図1とを作成したが、なお不備な点を多く感じているので、関係の各位より懇切な教示をいただきたく、お願いいたす次第である。

岐阜県下の市町村史誌は若干の町村を除いて刊行され、なお未刊の分が残されているものの、利用上好都合であった。とくに資料編が充実しており、克明に資料が記載されているものの多い点には感服した。資料のうちでは、猪の害を訴える嘆願書類や、鉄砲の下付願などの関係文書で実情を把握できたし、さらに村明細帳などの地誌的資料に記載された鉄砲の有無等が好都合であった。なかでも明治2～5年にわたる明細帳、それに明治14年の「町村略誌」の記載は有益であった。町村略誌は「興国地誌」の系統に属するものとみられるが、記載内容は統一されており、そのうち銃については、民用銃・軍用銃・職猟銃・無税猟銃などに分類記載されている。た

だし、市町村の編集方針により、これらの収録には統一性がない。これらの点は今後改めて、岐阜県立図書館の同蔵書を親しく調べる必要を感じている。幸い同館でこれらを整理して目録を刊行されている点有難い。

一方、通史編の内容では、自然編に動物の項のあるものは便利であった。市町村の実態に応じて記載内容には特色があるものの、イノシシ生息のみられる地域の市町村史誌のうちには、その被害や猪垣の記載までに及んでいるもののある点は有難い。ただし、記載のない市町村でも、実際にはイノシシ関係の事象の見られる場合もあり、この点ではさらに入念な調査の必要を感じている。なお、イノシシの被害や猪垣の記載が詳細にされている史誌類も多く、とくに写真や図表を用意されているものもあり、多大の裨益を得た点、感謝している。また、イノシシの害が時代によって有無相異なり、その対策にも差異のある点、注目された。すなわち、石・土手・堀・柵などを用いる伝統的な猪垣に対して、近年の対応は電気柵・トタン板の柵など近代的な手法によっている。また木柵でも檻を用意した捕獲柵などがあり、落し穴を併用した古い猪垣の近代型とみられるものもある。さらに銃による捕獲が多く、猟友会に依頼をする形態が多くみられる。本来、竹槍や猪突槍を用いたものが鉄砲に発展し、猪狩などを村を挙げて行ったものであるが、現在は猟友会などの団体の協力に依っている。なお、かような行動が成立するほどに、イノシシをふくめた野獣の頭数も増加しているのが注目される。

掲載の表1は以上のような条件のもとで、まとめて作成したものである。とくに猪垣関係の事象のみられない市町村には「×印」を付したが、果たしてこれが妥当のものか、関係の各位からの教示を仰ぎたい点である。また、記載内容についても不備が多いと思われるので、この点も指摘していただき、修正したく考えている。なお、記載の名称は史誌や

市町村からの回答に基づいたもので、これは各地で用いられている呼称を重視する方針からである。

ここで注意されるのは、猪垣・銃などは各市町村全域にみられるわけではないことである。その存在する市町村単位に挙げたわけであるが、ただ銃は極めて少数の旧村（集落）にのみみられる場合は、ないことにした。集落別の分析は今後に進めたいと考えている。

つぎにこの表1のうち、新旧の主要な猪垣と銃・槍について、分布図（図1）を作成し、その配置状態をみることにした。

当該事項のない市町は木曾川・揖斐川・長良川などの下流地域、輪中地域にみられる。低湿地で、林地はなく、イノシシの生息には不適の地で当然の結果といえよう。また岐阜市・高山市などの市街地中心の市域も同様である。なお、東縁の恵那郡坂下町、西縁の揖斐郡坂内村などにも欠けている点は注目される。県境に近い奥地で、イノシシと人間生活との係りがさして濃くないことの反映ともみられるが、さらに検討をすすめたい。

猪垣が飛驒の北部地域にみられないことは大きな特色である。これは前記の分布図とも一致する。この地域は銃もしくは槍で猪害を十分に駆除できたとみられる。猪垣は、莊川・清見・宮・朝日・高根諸村と、久々野町以南の飛驒地域にみられる。一方、郡上郡北部の4町村には猪垣はみられない。これらの北部地域は積雪も多く、この時期は猪狩に槍を用いて行った。

さらに猪垣は美濃西部の養老山地から能郷白山を中心とする福井県境山地、さらにここから八幡町・和良村を結び、上記飛驒の金山町・下呂町を経て、恵那郡・加茂郡域に分布する。猪垣のうち、石垣のものは広い分布を示すが、飛驒から東濃にかけての地域と、西濃地域とに2大別される。中央の八幡町周辺には木柵の猪垣が分布し、その範囲は東・西・北の周辺に拡がり、平野部を取囲むよう

に分布する。土手・堀などの猪垣は西濃に多く、分断して東濃にも若干の地域にみられる。最も嚴重な猪垣は石垣であるが、これは山寄りの地域に多い。これは材料の存在とイノシシの害の著しいことが結びつた結果ともみられる。土手・堀は上記の西濃・東濃のほかは飛驒に若干分布する程度で、さして広い分布を示さない。木柵は前述のように県域南半部に広く分布するが、養老山地と東濃南部に欠けている。

ところで、近年のイノシシ害に対しては、電気柵・トタン柵が設けられ、捕獲柵（木柵）もまた用いられている。これらは西濃地域ではみられず、美濃中央から東濃にかけて分布する点が大きな特色である。なお飛驒の清見村・馬瀬村にもあり、近年のイノシシの移動路を反映しているようにも思われる。清見村が通路にあたることは、前述のように、かつて急激な大雪にて逃げ場を失って大量のイノシシが斃死し、その供養塚を立てたことにもうかがわれよう。また東濃のものは長野・愛知両県山地とのイノシシの交流も推察される。

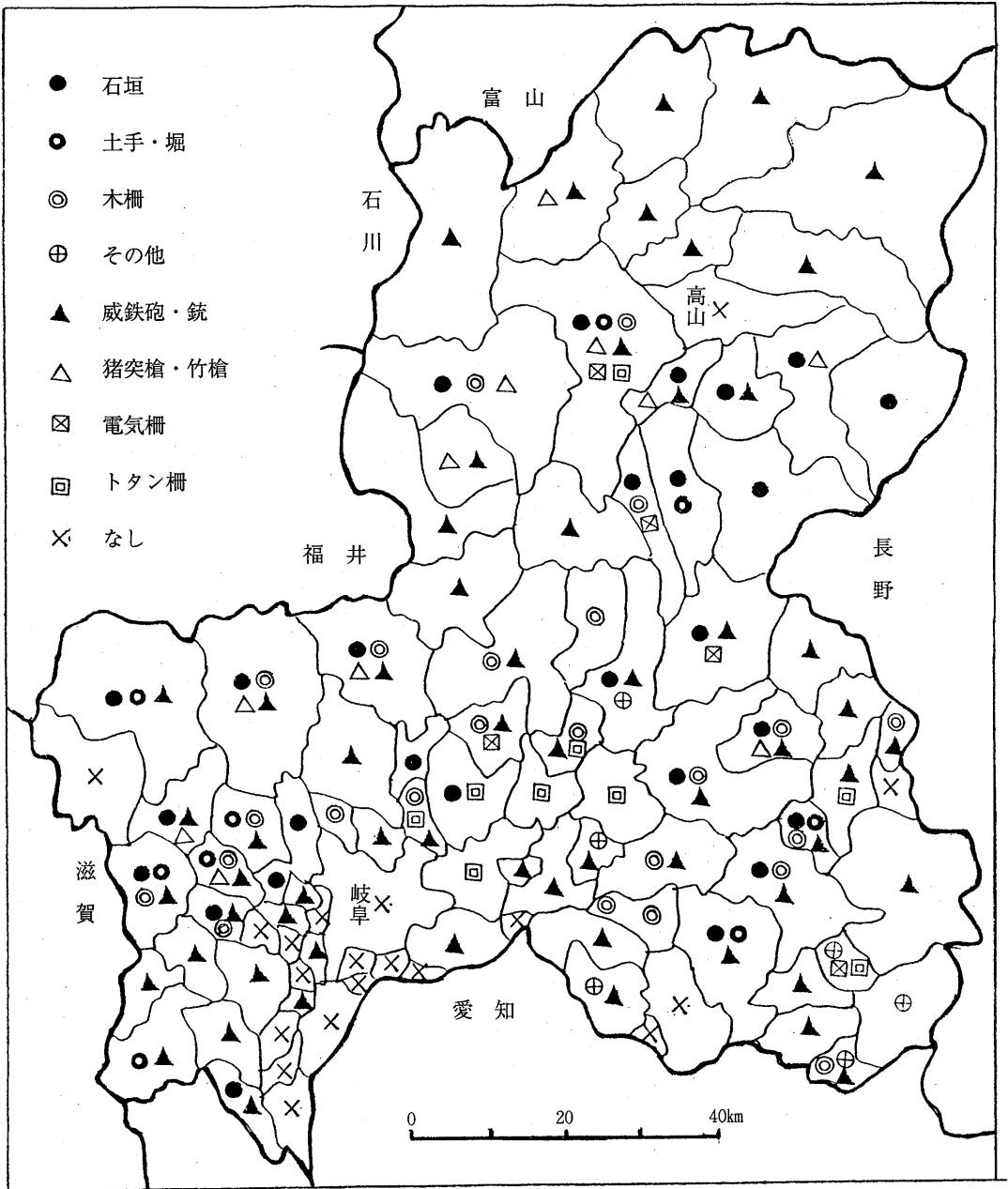
猪垣の構築とさらにその維持管理を比較すると、銃の利用ははるかに効率的といえよう。江戸時代より、管理の厳しい銃砲の許可を求め、支配側もこれを認めたことは、その効用の必要性が著しく、効果も大きいことを示したものとといえよう。銃の利用は全域にあることが特色であるが、さらにこれについては集落別の考察を進めたい。なお、槍の分布は奥山地にみられるが、それは降雪地にイノシシを突いたもので、敏捷なイノシシに対して自然条件を巧みに利用した狩猟法であったといえる。

むすび

農作物に害を与える病虫鳥獣害のうちで、イノシシの害は著しく、その防除に猪垣をつくり、また捕獲による撲滅など、農民はその

表1 岐阜県における猪害対策（市町村別）

	防						除			捕 獲		
	石 垣	土手、堀	木 柵	電気柵	トタン柵	その他	音	臭	鉄砲 威 威	砲 威 威	槍	その他
岐阜市	×									○		
大垣市												
高山市	×											
多治見市						鹿鹿(カマ)			○	○		ワナ・糞美
関 市					トタン柵				○	○		
中津川市									○	○		
美濃市	猪垣				トタン柵				○	○		おとし穴
瑞波市	猪垣	猪垣							○	○		
羽島市	×								○	○		ワナ
恵那市	猪垣		木柵			金網			○	○		
美濃加茂市									○	○		
土岐市	×								○	○		
各務原市									○	○		
可児市									○	○		
羽島郡	川島町	×										
	岐南町	×										
	笠松町	×										
	柳津町	×										
海津郡	海津町	×										
	平田町	×										
	南濃町		猪垣						○	○		猪狩・糞美
養老郡	養老町								○	○		
	上石津町		猪鹿垣						○	○		
不破郡	垂井町								○	○		しし狩 猪鹿狩
	関ヶ原町								○	○		
安八郡	神戸町	×										
	輪之内町	×										
	安八町	×							○			
	墨俣町	×										
揖斐郡	揖斐川町		しし垣・しし溝	ししがき		猪鹿追人・祈祷			○	○	竹槍	おとし穴・ しし追い ししおり 鉄砲つきワ ナ
	谷汲村		ししどい	猪垣			ガス鉄砲	ダイヤ・髪 薬(カガシ)		○		
	大野町	猪鹿垣				鹿番・猪小 屋				○		
	池田町	猪垣							○	○		
	春日村	猪鹿垣	土手垣・切落・ 築垣・掘切	杭垣					○	○		
	石杭垣								○	○		
	久瀬村	猪鹿垣							○	○	猪槍	猪狩 オシ・おど し穴
	藤橋村	猪鹿垣	土手(井)垣		猪番		ホラ貝		○	○		
	坂内村	×							○	○		
本巣郡	北方町	×										
	本巣町		ししがき									
	穂積町									○		
	奥南町	×								○		
	真正町									○		
	糸貫町									○		
	根尾村	猪鹿垣		割木		鹿番	自動装置付 猪おとし		○	○	槍	猪狩
山県郡	高富町									○		ワナ 糸ビシワナ
	伊自良村			防止柵					○	○		
	美山村								○	○		



岐阜県市町村史誌、関係文献ならびに県市町村教育委員会の回答などにより作成。

図1 岐阜県下の猪害対策—猪垣・銃槍等の分布

対策に苦勞してきた。猪垣には一番堅固な石垣から土手・堀・木柵や、音・臭を発生して防ぐなど多様な方法があり、地域によっては現在も用いられているものがある。なお、現在はトタン柵や電気柵などの新法が用いられている。また捕獲の方法では銃を昔も今も主とするが、槍も用いられ、ワナや落とし穴なども設置してきている。

これまで研究された猪垣の文献を収集してみ、その分布を体系的にみたいと考え、本調査を始めた。東北・北陸地方を除いて、広く猪垣はみられるが、本論ではまず、東海・北陸に接する岐阜県下についての分布をまとめてみた。イノシシは脚が短かく雪に弱いが、岐阜県下の北部では猪垣はみられず、また低湿地の南部にもない。石垣は飛驒の中央部から美濃にかけて広く分布する。土手は西濃に多く、木柵は西濃から東濃へと、南部の平地を囲むように広がっている。なお、その中央域にトタン柵・電気柵が分布する。銃は広く県下で使用されているが、槍は北部から西部にかけての奥山地にみられる。

かような猪垣の諸形態の分布には地域的な特色が明らかにみられる。しかし、なお不備な点が多いので、各位よりの教示をいただき、完璧を期したい。その上で、イノシシの生態と農耕、自然などとの関係を明らかにし、分布の要因を究明したいと思っている。叱正のほどをお願いする次第である。

この研究は昭和63年度文部省科学研究費の補助を受けたものである。先学の研究に多大の恩恵を与えられ、関係の教育委員会からも教示を得た。また、関係県立図書館の支援も受けた。資料整理には加藤光子さん・清水美津子さんや学生にも協力を得た。ここに深甚の感謝の意を表するものである。

文献および注

1) 直良信夫：古代日本の漁獵生活，葦牙書房，

1946，133-137.

2) E.アイザック著，山本正三・田林明・桜井明久共訳：栽培植物と家畜の起源，大明堂，1985，43，115頁。

3) 岐阜県高等学校生物教室研究会：岐阜県の動物，大衆書房，49頁。

4) 諏訪教育会自然研究部動物委員会：諏訪の動物たち，諏訪教育会，1975，61-62。

5) 諏訪の自然誌・動物編編集委員会：諏訪の自然誌，動物編，1978，121-127。

6) 岐阜県の哺乳動物調査研究会：続岐阜ふるさとと動物たち，大衆書房，1987，32-33。

7) 岐阜県哺乳動物調査研究会：岐阜ふるさとと動物たち，岐阜日日新聞社，1982，22-23。

8) 渡辺賢雄：板取村史，岐阜県板取村教育委員会，1982，217頁。

9) 大和村（岐阜県）：大和村史 通史編 上巻，大和村，1982，716頁。

10) 岐阜県清見村教育委員会：きよみ風土記，清見村教育委員会，152-153。

11) 野本寛一：焼畑民俗文化論，雄山閣，1984，162-183。

12) 千葉徳爾：近世の山間集落，名著出版，1986，95頁。

13) 千葉徳爾：上掲（12）100頁。

14) 香川県池田町・土庄町教育委員会報告。

15) 長崎新聞社：長崎県大百科事典，長崎新聞社，1984，670頁。

16) 向山雅重：伊那農村誌，慶文社，1984，139-205。

17) 阿比羅嘉弘：猪垣について，対馬風土記，対馬郷土研究会，10，46-48。

18) 陶山鈍翁：猪鹿追詰覚書，日本庶民生活史料集成，10，三一書房，1970，339-346。

19) 千葉徳爾：前掲（12），97頁。

20) 早川孝太郎：猪・鹿・狸，角川文庫，1955，9-20。

21) 千葉徳爾：日本列島における猪・鹿の棲息状態とその変動，地理学評論，37-11，1964，1-18。

22) 千葉徳爾：狩獵伝承研究，風間書房，1969，56-61。

23) 環境庁：第2回緑の国勢調査—第2回自然環境保全基礎調査報告書— 大蔵省印刷局，1983，108-115，150項。

24) 楠美鉄二：青森県百科事典，東奥日報社，1981，92-93。

- 25) 福島民報社：福島大百科事典，福島民報社，1980，83頁。
- 26) 河北新報社：宮城県百科事典，河北新報社，1982，62頁。
- 27) 石川県教育委員会文化課長細川紀彦氏談。富山県教育委員会文化課松島吉信氏談。
- 28) 町村指定の文化財は岐阜県大野郡清見村，同益田郡萩原町，埼玉県東秩父村など。埼玉県大滝村には県指定有形民俗資料（上中尾の猪垣），愛知県額田町には県指定重要文化財（万足平の猪垣），さらに長崎県指定有形民俗文化財として西海町に「西彼杵半島猪垣基点」，豊玉町～「豊玉の猪垣」がある。大分県鶴見町では県の文化財指定を目的に調査計画の由。
- 29) 北原寛：飯田地方の猪土手，信濃，1-2，1932，423-426。
- 30) 田中享一：イノシシ生息実態調査報告書〔神奈川県委託調査〕1960。
- 31) 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課報告。
- 32) 宮崎日日新聞社：宮崎県大百科事典，1983，69頁。
- 33) 沖縄大百科事典刊行事務局：沖縄大百科事典，上巻，沖縄タイムス社，1983，150頁。
- 34) 出島村史編さん委員会（茨城県）：出島村史，出島村教育委員会，1971，98-100。
- 35) 三重県立農業試験場：三重県農業地図，第一集。同説明書，1953，第12図，65-67。
- 36) 桐原健：縄文のムラと習俗，雄山閣出版，1988，124-135。
- 37) 唐沢貞次郎：上伊那郡宮田村猪土手，長野県史蹟名勝天然記念物調査報告書，第5輯，1926，復刻 第1巻，682-687。
- 38) 久瀬村（岐阜県）：久瀬村史誌，久瀬村1973，264頁。
- 39) 茅野市：茅野市史，中巻 茅野市，1987，679頁。